

張衡と占術

前原 あやの

はじめに

中国古代の学問の一つに、術数（数術ともいう）という分野がある。これは中国で独自に発達した分野で、天文暦算などの自然科学と、占いなどの要素が結び付いたものであり、川原秀城氏は、術数学を広義の「数」の学術のことであると述べる。^①その術数を窮めた人物の一人に後漢の張衡（七八～一三九年）がいる。崔瑗が張衡を「数術窮天地、制作侔造化^②（数術は天地を窮め、制作は造化に侔し）」と称したように、張衡は当時から術数に通じた人物と評価されていた。

張衡は、『文選』に収録された「東京賦」や「西京賦」（合わせて「二京賦」という）、「思玄賦」、「埽田賦」など多くの賦を遺した文学者として知られる。富永一登氏は彼を「漢賦において枢要な位置を占める文学者として、漢代の学術文化を研究する上で、看過できない人物」と評価する。^③張衡はまた一一五年から一二一

年、一二六年から一三三年の二度太史令の職に就き、天文学者として『靈憲』や『渾天儀』などの著作を遺した。張衡の天文学者としての姿勢は、実際に天体を観測し、目に見える現象を合理的に説明しようとするものであった。さらには、「日食上表」や「京師地震対策」といった上疏を行い、水運渾天儀や候風地動儀、参輪といった機巧を数多く作成した。

このように幅広い分野で活躍する張衡であるため、その思想は文学的立場から、また天文学的立場からそれぞれ研究されることはあるものの、それらを統一した全体的な把握は容易ではない。しかし、張衡という人物を理解するためには分野を越えて著作の検討を行う必要があると考え、本稿では、文学作品である「思玄賦」と天文学的著作である『靈憲』、また政治的資料としての「請禁絶凶讖疏^④」などを取り上げて、広く張衡の思想傾向を検討する。「思玄賦」や『靈憲』には、『易』による占いの場面がある。また「思玄賦」では『易』以外にも数種類の占いが記述され、張衡の占術

に対する見方が覗える。そこで本稿では、張衡の作品に見られる占術表現について検討し、張衡が占術をどのように捉えていたかを考察することで、張衡の思想の一端を明らかにしたい。このことは、術数学と張衡の関係を検討する一助にもなると考える。

具体的には、まず「思玄賦」や「靈憲」に見られる占術表現を取り上げ、作品中で占術がどのような位置づけにあるのかを考察する。そして、張衡が予言の要素の強い讖緯思想をどのように捉えていたのかを検討し、最後に、張衡の占術に対する考えを明らかにする。

一、「思玄賦」の占術表現

まずは「思玄賦」に見られる占術表現について考えてみたい。「思玄賦」は『文選』以外に『後漢書』張衡伝（以下張衡伝と表記）にも全文が収録されているが、各々注釈者も異なり、文字の異同もある。『後漢書』は南朝宋の范曄による撰で、唐の李賢が注を施し、更に清の王先謙が集解を付した。張衡伝冒頭の集解に「洪亮吉曰、案注最草率。当時不知何人分注。又卷頁独長。蓋注後未加校勘耳（洪亮吉曰く、案するに注最も草率なり。当時何人の注を分くるかを知らず。又卷頁独り長し。蓋し注の後未だ校勘を加えざるのみ、と）」とあり、注が長く煩雑であり、まだ草稿段階であったと述べられている。また『文選』は南朝梁の昭明太子の撰であり、唐の李善による注がある。「思玄賦」には張衡自身の

注が「旧注」として付されていたとされるが、李善はその「旧注」につき、

未詳注者姓名。摯虞「流別題」云衡注。詳其義訓、甚多疎略。而注又称愚以為。疑非衡明矣。⁶⁾

（未だ注者の姓名を詳らかにせず。摯虞の「流別題」に衡の注と云う。其の義訓を詳らかにするに、甚だ疎略多し。而して注又た愚以為らくと称す。疑うらくは衡に非ざること明らかなり。）

と注しており、張衡によるものとは考えにくい。

「思玄賦」は、張衡が侍中となつた後、五八歳の時に作つたとされる。⁷⁾ 作成の動機として、張衡伝には次のようにいう。

後遷侍中、帝引在帷幄、諷議左右。嘗問衡天下所疾患者。宦官懼其毀己、皆共目之。衡乃詭對而出。闞豎、恐終為其患、遂共讒之。衡常思囟身之事、以為吉凶倚伏、幽微難明。乃作「思玄賦」、以宜寄情志。

（後に侍中に遷り、帝引きて帷幄に在り、左右を諷議す。嘗て衡に天下の疾悪なる所の者を問う。宦官其の己を毀ることを懼れ、皆共に之を目す。衡乃ち詭對して出づ。闞豎、終に其の患を為すことを恐れ、遂に共に之を讒る。衡常に身を囟

るの事を思い、以為えらく、吉凶は倚伏し、幽微にして明らかにし難し、と。乃ち「思玄賦」を作り、以て宜しく情志を宜べ寄す。）

この記述によると、張衡が侍中の際に帝から天下の害悪を問われ、宦官が名を挙げられることを恐れて逆に張衡を誇ったことが「思玄賦」作成の動機となっているようである。また、李善の『文選』題字注にはこうある。

順和二帝之時、国政稍微、専恣内豎。平子欲言政事、又為奄豎所讒蔽、意不得志。欲遊六合之外、勢既不能、義又不可。但思其玄遠之道而賦之、以申其志耳。系曰、回志竭来從玄謀、獲我所求夫何思。玄而已。『老子』曰、「玄之又玄、衆妙之門」。

（順和二帝の時、国政稍く微え、内豎に専恣せらる。平子政事を言わんと欲するも、又奄豎の讒蔽する所と為り、意志を得ず。六合の外に遊ばんと欲するも、勢として既に能わず、義としても又可ならず。但だ其の玄遠の道を思いて之を賦し、以て其の志を申ぶるのみ。系に曰く、志を回らせ竭来して玄謀に従う、我が求むる所を得ては夫れ何をか思わん。玄なるのみ。『老子』に曰く、「玄之又玄、衆妙の門」と。）

ここで「思玄賦」の「玄」は、『老子』の一節にいう「玄」であると述べられる。そういった要素もあるかもしれないが、張衡が揚雄の『玄経』（『太玄』）を好んだという記述が張衡伝にあることから、『太玄』の「玄」を指すとも考えられる¹¹。

「思玄賦」の内容は、求める所を探して広く四方上下に赴き、遠遊するというものである。正しい道を進もうという自身の志が当時の世に受け入れられないことを嘆き、旅に出る。東↓南↓西↓北へと順に巡り、句芒や禹、二妃（女娥と女英）、黄帝らと出会うが、留まることはなく、地下世界を経て天上界に至る。神々に命を下し、星々の世界を遊び、最終的には故郷へと帰っていくというストーリーになっている。当時の他の文章と同じく、多くの典故に拠った賦である¹²。

（1）「思玄賦」の『易』占い

張衡伝と『文選』の注釈を見ていくと、「思玄賦」には『易』に基づいたとされる箇所がある。それも、ただ語句を引用するだけでなく、『易』の卦を表わす内容を盛り込み、賦全体の中でも意味あるものとして挿入している。そこでまず、該当箇所を以下に挙げ、その意義を確認する。以下「思玄賦」の引用は主に張衡伝に従うが、『文選』と文字の異同がある場合は注に表記する。『易』占いは賦の初めの部分で、旅に赴くかどうかを決める際に為された。

られている象を以下に挙げる。

- 艮…山（崇岳）
 巽…風・長女
 乾…氷・金・玉・天
 兌…毀折・沢・少女

これらは全て、『易』説卦伝にみえる象である。張衡は象を賦に取り込むことで、賦の内容に深みを持たせると共に、卦の持つ意味合いを強調している。これらの卦は、全体を通して遯卦上九の占辞を表現したものである。遯卦の六爻の内から三爻を選び出し、その卦が象徴するものを読みこんでいる。以下順に、どのように三爻を選び出したかを見ていく。

一つ目は艮(☶)である。艮卦は、遯の内卦(初爻・第三爻)に当たる。艮は山を象徴する。だから賦に「衆山」(③)や「崇岳」(④)が出てくるのである。遯を内卦・外卦に分けて出てくる、最も基本的な選び方であるといえる。

次に、巽(☴)である。巽卦は遯卦の中で、第二爻から第四爻までを取り出した卦に当たる。このように、一つの卦のうち初爻と上爻を除き、第二、三、四爻もしくは第三、四、五爻を用いて新たな八卦を取ること互体の象という¹⁸⁾。互体の象として巽を取りだし、巽が風を象徴することから③の「迅風」を導き出した。また、巽は同時に長女を意味する。これも、八卦を父母六子に配当する『易』説卦伝の考え方である。

①心猶与而狐疑兮即岐趾而據情¹³⁾
 心は猶お与えて狐疑し、岐の趾に即きて情を據ばす

②文君為我端著兮利飛遁以保名

文君我の為に著を端し、飛遁して以て名を保つに利あり

③歴衆山以周流兮翼迅風以揚声

衆山を歴て以て周流し、迅風を翼けて以て声を揚ぐ

④二女感於崇岳兮或氷折而不營

二女崇岳に感じ、或いは氷折して営まず

⑤天蓋高而為沢兮誰云路之不平

天蓋し高くして沢と為り、誰か路の平らかならずと云わん

⑥勗自強而不息兮蹈玉階之嶢崢¹⁵⁾

勗めて自ら強いて息まず、玉階の嶢崢を蹈む

ここで占いの結果出たのは遯(遁)☶が咸☱に変じる卦である。遯卦は艮下乾上、退避や隠遁の意味をもつ。上九爻が陽から陰に変じるため、占辞は遯卦上九の爻辞をとる。注によるとまず、遯卦上九の爻辞に「肥遯。无不利(肥遯す。利あらざるなし)」とあるのを挙げて、賦の「飛遁」を説明している。文字の異同はあるものの、王先謙の集解や『古周易訂詁』の何楷注にいうように、「肥遯」と「飛遁」(飛遯)は同義であると考えられる¹⁷⁾。③以下では八卦の象を用いて遯卦を説明している。「思玄賦」で用い

乾卦(☰)の選び方には二通りの方法が用いられる。まず、咸卦の第三爻から第五爻までを取りだしたものだ。これは④の解釈に用いられ、氷を象徴するということから「氷折而不宮(氷折して宮まらず)」を説明している。さらに、⑤は張衡伝の李賢注・『文選』李善注に「乾變為兌(乾變じて兌と為る)」と説明されるが、これは遯卦(☶)から咸卦(☱)に変わる際の外卦(第四爻・上爻)が、乾(☰)から兌(☱)に変わったことを指している。乾は天、兌は沢を象徴することから、「天蓋高而為沢(天蓋し高くして沢と為る)」の表現が現われる¹⁹⁾。他にも、兌は少女であるために、巽と兌の双方で「二女」(④)と述べたり、乾が金・玉を表わすことから「玉階」(⑥)を説明している。

以上の取象によって「思玄賦」では、遯卦から咸卦に変じた占いの結果を文学的に表現している。山々を越えて各地を巡り、二人の女性(玉女と宓妃)に心を動かされるが、努力を怠らなければ天への道を進んでいくという、以降の賦の内容を象徴した形となっている。結果、これからの遠遊を後押しする占辞が出たことになる。

上記の卦を導く際に、張衡は変卦と互体という二種類の方法を用いて説明している。これらは漢代象数易の大きな特徴である。同じ遠遊文学であり、張衡が「思玄賦」を作る際大いに参照したと考えられる『楚辞』「離騷」にも占いの場面がある。ただし、その占辞は詩的であり『易』に基づいたものではない。張衡は、

『易』の占辞と賦の世界観を巧みに一体化させたといえよう。

(2) 「思玄賦」の亀甲占い

前節で見たように張衡は『易』によって「肥遯」、すなわち「世を逃れるべし」という結果を得たにも関わらず、さらに亀甲によって遠遊の吉凶を再度占っている。先の引用に続く部分である。

① 懼筮氏之長短兮鑽東龜以觀禎

筮氏の長短を懼れ、東龜を鑽きて以て禎を觀る

② 遇九臯之介鳥兮怨素意之不逞

九臯の介鳥に遇い、素意の逞しからざるを怨む

③ 遊塵外而瞥天兮挹冥翳而哀鳴

塵外に遊びて天を瞥、冥翳に挹りて哀鳴す

④ 鵬鶚競於貪婪兮我修絜以益榮

鵬鶚は貪婪を競い、我絜を修めて以て益々榮ゆ

⑤ 子有故於玄鳥兮歸母氏而後寧

子玄鳥に故有り、母氏に歸りて後寧んず

①は、『春秋左氏伝』の中で晋の卜人の言として、「筮短龜長不如從長(筮は短く龜は長し。長きに從うに如かず)」とあることによるものと考えられる。筮竹による占いは短期間の視点であるから、亀甲によって改めて占おうというのである。ここで出たの

は、「遇九臯之介鳥（九臯の介鳥に遇う）」という筈である。この箇所を張衡伝李賢注では『易』中孚卦（䷛）を引いて説明する。②以下の内容は鶴が独りで棲むことを意味している。鶴は一羽で寂しく鳴くということ、世に出て活躍することができないという意味になる。そして、世に出ても成功しないが、世間を離れ自身を見つめるべきである、つまり「遠遊に行くのが良い」という結果を表現したわけである。これらの占いの結果を得て、遠遊が始まる。

（3）「思玄賦」の占夢

「思玄賦」にはもう一つ、夢占いの場面が出てくる。これは先の二つとは異なる場面、天上界に向かう直前の出来事である。

- ① 抔巫咸以占夢兮迺貞吉之元符
巫咸をして以て夢を占わしめ、迺ち貞吉の元符たり
- ② 滋令徳於正中兮合嘉禾以為敷
令徳を正中に滋らせ、嘉禾を合わせて以て敷と為す
- ③ 既垂穎而顧本兮爾要思乎故居
既に穎を垂らして本を顧み、爾故居を思わんことを要す
- ④ 安和静而随时兮姑純懿之所廬²⁷
安くんぞ和静にして時に随わん、姑く純懿の廬る所なり

これは、遊行を始めた直後に大木のような稲穂を夢に見たことを受けての占いである。²⁸ 貞吉は、『易』でよく用いられる。稲穂が垂れて根元に反り返る様子から、故居に思いを寄せ、時勢に従って生きるのが良い、という。巫咸は、張衡伝に引用される『応問』にも「咎单巫咸寔守王家（咎单・巫咸寔に王家を守る）」として名が挙げられる。李賢注によれば巫咸は殷の忠臣であり、占術を以て仕えたと考えられる。²⁹

占夢は『周礼』に「占夢の官」の役職について記述があり、夢を占うという行為が古くから容認されていたことがわかる。占夢に関する先行研究として、湯浅邦弘「中国古代の夢と占夢」（『鳥根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』第二二巻第二号、一九八八年）がある。王充『論衡』や王符『潜夫論』による占夢観は、当時の人々が夢の予兆性や占夢自体を認め、ただそれを正しく理解し得ないという状況を批判している。湯浅氏によると占夢の術の衰退は後漢期以降であり、張衡が生きていた頃はちょうど占夢の権威が転換する時期に当たると思われる。張衡はその中で、夢の予言性を容認しその権威を受け容れていたといえる。また、西林眞紀子「古代中国の夢占いについて」（『大東アジア学論集』第五号、二〇〇五年）では、『周礼』に見える夢の占い方が、天体の観測や陰陽五行など多方面から論じられ、占夢が国家にとって重要であったと述べる。

二、『靈憲』の『易』占い

次に、『靈憲』に見られる占術表現を検討する。張衡の著書『靈憲』は、宇宙論について書かれた文献といわれ、古くから渾天説に関する重要な記述と看做されてきた。その内容は宇宙生成に関するもの、天文現象を説明するもの、日月や星に関する説話など、広く宇宙を説明するものである。しかし佚書であり、正史の注や類書の引用によってしか内容を窺うことができない。『經典集林』や『漢魏六朝百名家集』などに輯本があるものの、佚文を収集・整理した厳密な校定は為されていないのが現状である。

『靈憲』にも『易』を用いて行く先を占う表現がある。姮娥が不死の薬を得て、月に逃げようとする際の『易』占いである。

羿請無死之藥於西王母。姮娥竊之、以奔月。將往、枚筮之於有黃。有黃筮之曰、「吉。翩翩婦妹。獨將西行逢天晦芒、母驚母恐。後其大昌」姮娥遂託身於月。是為蟾蜍³¹。

（羿は無死の薬を西王母に請う。姮娥之を竊みて以つて月に奔る。將に往かんとし、之を有黄に枚筮す。有黄之を筮して曰く、「吉。翩翩として婦妹。獨り將に西行して天の晦芒に逢わんとするも、驚くなかれ恐れるなかれ。後且に大いに昌えんとす」と。姮娥遂に身を月に託す。是れ蟾蜍たり。）

占いの結果出てくる卦は「婦妹卦³²」である。しかし、婦妹の卦辞は「婦妹。征凶。无攸利(婦妹。征けば凶。利するところなし)」であり、「行くべきではない」とはつきり述べられている。つまり、ここで出た卦も「思玄賦」の時と同様、之卦であると考えられる。経文を見たところ、最もふさわしいのは初九の爻辞である。

初九。婦妹以娣。跛能履。征吉。³³

(初九。婦妹娣を以てす。跛にして履む。征くときは吉なり。)

前進することが吉とある。占辞が初九の爻緯であると考えれば、ここで出た卦は「婦妹卦³²」が解卦³⁴に変じる」ということになる。ただし、「西行」や「天晦芒(天の晦芒)」、「大昌(大いに昌えん)」という占辞の根拠については、今後さらに検討する必要がある。

以上、第一章、第二章において張衡の作品に見える占術表現を一つずつ検討してきた。これらの占術表現から分かることは、張衡にとって占術は進退を決め、求める所を得る際の動機づけとなるものだったということである。張衡は後漢の知識人の例に洩れず、『易』や亀甲、夢占いといった占術と密接に関わっていたことがわかる。

三、讖緯に対する態度

讖緯とは、前漢末から流行した緯書の内容を指す言葉である。安居香山氏によれば、讖は天文占いなどの未来予言書、緯は経書を補足する解釈書を意味するという。³⁴ 未来予言という点で讖は占術の要素を持つといえる。そこで本章では、張衡が讖緯思想をどう捉えていたかについて検討する。

(1) 「請禁絶凶讖疏」

張衡は一般に、讖緯を批判した人物として知られる。理由は、張衡が凶讖の禁止を要請する上疏を行なったことによる。この上疏文は張衡伝に引用されているが、内容をよく検討してみると、張衡が讖緯思想全てを否定していたわけではないことがわかる。

まず、張衡が上疏に至った背景について、張衡伝は次のように記している。

初光武善讖、及顯宗肅宗、因祖述焉。自中興之後、儒者争学凶緯、兼復附以妖言。衡以凶緯虚妄、非聖人之法。³⁵

(初め光武讖を善くし、顯宗・肅宗に及びては、祖述に因る。中興よりの後、儒者は争いて凶緯を学び、兼ねて復た附すに妖言を以てす。衡おも以らく凶緯は虚妄にして、聖人の法に非ず、と。)

張衡は後漢の光武帝以下、皇帝たちが讖に傾倒したこと、その後儒者が争って凶緯を学び、人々を惑わすような発言を行なったことを憂いている。そして凶緯の蔓延する状況を批判し、凶緯は聖人の法ではないという。以下に、上疏の一部を引用する。

臣聞、聖人明審律曆以定吉凶。重之以卜筮、雜之以九宮。經天驗道、本尽於此。或觀星辰逆順、寒燠所由、或察龜策之占、巫覡之言。其所因者非一術也。立言於前、有徵於後。故智者貴焉謂之讖書。³⁶

(臣聞くに、聖人は律曆を明審して以て吉凶を定む。之を重んじるに卜筮を以てし、之を雜えるに九宮を以てす。天を経とし道を驗とすること、本より此れに尽きる。或いは星辰の逆順・寒燠の由る所を觀、或いは龜策の占・巫覡の言を察す。其の因る所は一術に非ざるなり。言を前に立て、徵を後に有す。故に智者は貴びて之を讖書と謂う。)

上疏の冒頭で、聖人は律曆を明らかにすることによって吉凶を定めたと述べ、聖人が認めた占術として卜筮と九宮を挙げる。卜は亀甲占い、筮は『易』による占いである。九宮は『易緯乾鑿度』に「太一取其数、以行九宮(太一は其の数を取り、以て九宮を行る)」とあり、八卦を八方に配当し、中央を太一として九の区域に分ける考え方である。九宮に関しては鈴木由次郎氏が論じてお

り、「太一九宮を行ぐる法は、太極が八卦の間に流通変化する、易のいわゆる陰陽の変化消息の法をあらわしたものである」という⁽³⁸⁾。詳細な占いは明らかではないが、八卦を用いるという点で『易』に関係しており、また『易緯乾鑿度』の鄭玄注に「太一者北辰神名也（太一は北辰の神の名なり）」とあることから、星とも関わっていたと考えられる。

伝統的な占術は、星の動きや寒暑の要因を観察するとともに、亀甲や筮竹による占い、巫覡の言葉によって推察するものであるという。巫覡は張衡の「東京賦」にも記述があり、洛陽の追儼の様子を表わす際に記述される⁽³⁹⁾。張衡は、星や気候の変化を見て先行きを占う行為、また亀甲占いや『易』占い、そして占術に通じた巫覡の言葉を容認し、正当なものであると捉えていた。

一卷之書互異數事。聖人之言、執無若是。殆必虛偽之徒、以要世、取資。往者侍中賈逵摘讖、互異三〇余事。諸言讖者、皆不能說。至於王莽篡位、漢世大禍。八〇篇何為不戒。則知凶讖、成於哀平之際也。且河洛六芸篇錄已定、後人皮傳、無所容篡⁽⁴⁰⁾。

（一卷の書互いに數事を異にす。聖人の言、勢い是の若きこと無からん。殆ど必ず虚偽の徒、以て世に要め、資を取る。往者、侍中の賈逵讖を摘み、互いに三〇余事を異とす。諸の讖を言う者は、皆説くこと能わず。王莽の位を篡うに至

り、漢の世大禍あり。八〇篇何為れぞ戒めず。則ち凶讖を知るは、哀・平の際に成るなり。且つ河・洛・六芸の篇錄已に定まり、後人の皮傳、篡を容れる所無し）

ここでは、凶讖は一つの書物の中に矛盾した内容が併存すると述べ、それらは虚偽の記述であるという。また、凶讖が哀帝・平帝の時代に成ったものであるという言及は、讖緯思想の始まりについて述べた興味深い記述である。

且律曆卦候九宮風角、數有徵効、世莫肯学、而競稱不占之書。譬猶画工、惡凶犬馬、而好作鬼魅。誠以实事難形、而虚偽不窮也⁽⁴¹⁾。

（且つ律曆、卦候、九宮、風角は、數しば徵効有るも、世は肯えて学ぶことなく、競いて不占の書を稱す。譬えば猶お画工の、惡みて犬馬を画き、好みて鬼魅を作すがごとし。誠に以て实事は形れ難く、虚偽は窮まらざるなり）

「不占之書」とは占いの書として効果がないということである。よって李賢注は「謂競稱讖家也（競いて讖家を稱するを謂うなり）」という。ここで挙げられた律曆、卦候、九宮、風角に関して、張衡は「數有徵効（數しば徵効有り）」と価値を認めている。律曆と九宮については先述した。卦候は、その詳細は明らかでは

ないが、『旧唐書』曆志に「求卦候者、各以天地之策、及余秒累加減之、得去經朔日算及余秒^⑬（卦候を求むる者は、各おの天地の策を以て、余秒累加減之に及び、經朔日算を去りて余秒に及ぶを得）」とあり、曆と關係のある占術であったことが覗える。風角は占風のことである。占風については、坂出祥伸「風の觀念と風占い——中国古代の疑似科学——」（新田大作編『中国思想研究論集——欧米思想よりの照射』雄山閣出版、一九八六年）に詳しい。坂出氏によれば、占星と占風が同一の人物によって行なわれる例があり、両者は深く關係しているという。また『史記』天官書^⑭を引用して、占星・望氣・占風がいずれも天文に関する占法であると考えられていたことと、これらの職掌がいずれも天文をつかさどる管制、つまり太史に属するものであったことを指摘する^⑮。

ここで挙げられた律曆や卜筮、卦候、九宮、風角に共通することは、いずれも何らかの形で天体の運行、あるいは『易』に關係しているという点である。星々の運行という世界の変化、その変化を把握し説明する『易』、それらが未来を知る上で信用に足るものであったと張衡が考えていたことがわかる。

「請禁絕凶讖疏」の内容を見ていくと、張衡自身の上疏は「讖」を批判するものの、「緯」という文字は一度も出てこない。張衡伝の文に現われるのみである。「思玄賦」には『河図』や『孝經援神契』などの緯書の語を用いて天上世界を表現する箇所がいくつもあり、『靈憲』にも『易緯乾鑿度』の用語を用いたと思われる

箇所がある。これらのことから、張衡が讖緯のすべてを否定したわけではないことがわかる。讖緯の「緯」の部分、つまり解釈書としての側面は容認してその世界観を受け容れ、「讖」の部分、すなわち未来予言に関わる面を批判しているのである。これは、正当でない「讖」を「非聖人之法（聖人の法にあらず）」と否定することで、伝統的な占術を擁護したものといえる。

（2）「思玄賦」の凶讖批判

先述の「思玄賦」にも凶讖を批判した箇所がある。それは、賦の主人公が黄河のほとりで黄帝に出会い教えを請うた際、黄帝の答えの中に現われる。

①夫吉凶之相仍兮恒反側而靡所^⑯

夫れ吉凶相い仍り、恒に側に反りて所なし

（中略）

②羸擿讖而戒胡兮備諸外而発内

羸讖を擿して胡を戒め、諸の外に備えて内に発す

③或輦賄而違車兮孕行産而為対

或いは賄を輦きて車を違え、孕めるもの行きて産み対と為す

④慎竈頭於言天兮占水火而妄諱^⑰

慎竈天を言うこと頭かにし、水火を占いて妄諱す

ここで張衡は、吉凶は互いに近く、容易に反転するという。これは『易』の思想と共通する考えである。続いて、嬴(秦の始皇帝)は「秦を滅ぼすものは胡である」という予言を信じて北方の胡に備えたが、実際は始皇帝の子、胡亥が政治を乱し、秦を滅ぼす要因を作ったことを述べる。⁴⁸ 外の「胡」ではなく内の「胡」が秦を滅ぼす要因であったことになる。また、④では魯の大夫梓慎が日食を見て洪水を予言したが、実際は日照りが起こったことと、火災の後鄭の大夫裨竈が火を祓うために⁴⁹ 權擧と玉瓚(玉製の盃と杓)を請うたが与えられず、「再び火事が起こる」と予言したものの結局火事は起こらなかったことを指摘する。⁴⁹ ④は一見すると占術そのものを否定しているように見えるが、必ずしもそうではなく、誤った解釈や自分の利益をまくろむ予言に対して批判を加えているといえる。

「請禁絶凶讖疏」にも見られるように、張衡が讖緯思想に対して述べたかったのは、後世の恣意的な解釈によって本来の占術を歪めたり、曲解したりすることを否定するということであって、占術そのものの否定ではないといえる。

おわりに

本稿での考察により、張衡が正統と捉える占術を重視し、将来を見定める際に重要な役割を持たせていたことが明らかになった。正統と捉える占術とは、『易』を始め、亀甲、占夢などを指

す。また律曆、卦侯、九宮、風角なども正統な占術に含まれたことがわかる。これらに共通するのは、天体や数に関する占術だという点であろう。張衡は太史令であり、宇宙の構造に関心を持ち、天体の動きを詳しく観察していた。つまり張衡は、天体のあり方と占術を密接に関連するものとして捉えているのである。したがって、凶讖についても、そのすべてを非難したのではなく、伝統的なものについてはこれを容認していた。天体(宇宙)がどのように動くかは、実測のみならず占術によって知ることができるといふ独自の認識を張衡はもっていたといえよう。

本稿では張衡の著作を取り上げてその占術観を検討した。ただし、多くの課題が残ったのも事実である。今後、同時代の他の人物の占術観とも併せ考察することで、張衡の術数学の意義や後漢の術数学の本質を明らかにしていきたい。

注

- (1) 川原秀城「中国の科学思想」(創文社、一九九六年)五六頁参照。
- (2) 『後漢書集解』(虚栄堂刊本) 張衡伝。巻第五九、二六葉表。
- (3) 富永一登「張衡の「思玄賦」について」『大阪教育大学紀要』第一部門第三五巻第一号、一九八六年) 一頁。
- (4) 疏の名称は孫文青『張衡年譜』(商務印書館、一九三五年)に従った。
- (5) 『後漢書集解』 張衡伝。巻第五九、一葉表。
- (6) 『文選』(胡克家本) 卷第一五、一葉表。
- (7) 孫文青『張衡年譜』(商務印書館、一九三五年) 参照。
- (8) 『後漢書集解』 張衡伝。巻第五九、一一葉裏。

- (9) 『文選』卷第一五、一葉表。平子は張衡の字である。
- (10) 『後漢書集解』張衡伝に「謂崔瑗曰、吾觀太玄、方知子雲妙極道」とある。
- (11) 富永一登氏も前掲「張衡の「思玄賦」について」でこの点を指摘している。
- (12) 「思玄賦」を特に取り上げて論じた先行研究はあまり多くない。注(3)の富永一登「張衡の「思玄賦」について」は、張衡が遠遊にどのような思いを託したのかについて考察している。その中で、「思玄賦」の各段落の内容を辿りながら、同じ遠遊文学とされる屈原「離騷」や「楚辭」遠遊篇、司馬相如「大人賦」と比較して論じている。中国では、許結「張衡《思玄賦》解読——兼論漢晉言志賦之承変」(『社会科学戦線』第九六期、一九九八年第六期)がある。
- (13) 『文選』では「予」に作る。
- (14) 『文選』では「臚」に作る。
- (15) 『後漢書集解』張衡伝。卷第五九、一四葉。また『文選』卷第一五、四葉を参照。
- (16) 『周易注疏』(重校宋本) 卷第四、八葉裏。
- (17) 『後漢書集解』張衡伝の卷第五九、一四葉表の集解参照。また、『周易訂詁』の注に「楊用修云、古文肥作琶字。或誤作蜚。遂有飛遜之說」とある。
- (18) 互体の象を含む取象の形式については、鈴木由次郎『漢易研究(増補改訂版)』(明德出版社、一九七四年)、劉大鈞『周易概論』(齊魯書社、一九八六年)を参照した。
- (19) 『後漢書集解』張衡伝。卷第五九、一四葉裏。また『文選』卷第一五、四葉裏。
- (20) 『春秋左氏伝』僖公二十六年にも、同様の「乾變為兌」を用いた表現がある。
- (21) 『後漢書集解』張衡伝。卷第五九、一四葉裏。また『文選』卷第一五、五葉表参照。
- (22) 『春秋左伝注疏』(重校宋本) 卷第二二、一四葉裏。
- (23) 『文選』では「作」に作る。
- (24) 『文選』では「乃」に作る。
- (25) 『文選』では「秀」に作る。
- (26) 『文選』では「亦」に作る。
- (27) 『後漢書集解』張衡伝。卷第五九、二二葉裏。また『文選』卷第一五、一四葉裏、一五葉表参照。
- (28) 『後漢書集解』張衡伝に「發昔夢於木末兮穀崐崙之高岡」とある。
- (29) 『後漢書集解』張衡伝。卷第五九、二葉裏。
- (30) 『後漢書集解』張衡伝に「咎單巫咸、並殷賢臣也」とある。
- (31) 『後漢書集解』天文志上。卷第百、三葉。
- (32) 『周易注疏』卷第五、三二葉裏。
- (33) 『周易注疏』卷第五、三二葉裏。
- (34) 安居香山「緯書と中国の神秘思想」(平河出版社、一九八八年) 二三四頁参照。
- (35) 『後漢書集解』張衡伝。卷第五九、九葉裏。
- (36) 『後漢書集解』張衡伝。卷第五九、九葉裏、一〇葉表。
- (37) 安居香山、中村璋八『重修緯書集成』卷一上(明德出版社、一九八一年) 四一頁。
- (38) 注(18) 鈴木由次郎『漢易研究(増補改訂版)』の一六三頁参照。
- (39) 『東京賦』(『文選』卷第三所収)に、「方相秉鉞、巫覡操蒨」とある。
- (40) 『後漢書集解』張衡伝。卷第五九、一〇葉裏。
- (41) 『後漢書集解』張衡伝。卷第五九、一一葉。
- (42) 『旧唐書』曆志。卷第三四、四葉裏、五葉表。
- (43) 『史記』天官書に「夫自漢之為天數者、星則唐都、氣則王朔、占歲則魏鮮」とある。
- (44) 坂出祥伸「風の觀念と風占い——中国古代の疑似科学——」二三四頁はか参照。
- (45) 『文選』では「仄」に作る。

- (46) 『文選』では「以」に作る。
- (47) 『文選』では「訊」に作る。以上は、『後漢書集解』張衡伝。卷第五九、一八葉裏。また、『文選』卷第一五、九葉裏～一〇葉裏を参照。
- (48) 『史記』秦始皇本紀参照。
- (49) 『春秋左氏伝』昭公一八年、昭公二四年参照。

Zhang Heng and Fortune-telling

MAEHARA Ayano

Zhang Heng was a Chinese astronomer who lived during the Eastern Han Dynasty of China. Zhang was promoted to grand historian (太史令), and his job was to record heavenly observations. Zhang believed that any observable phenomenon could be explained by scientific means and he tried to seek a rational explanation for such phenomena. Zhang submitted a report entitled 請禁絕圖讖疏 to the emperor about his controversial ideas, and criticized the prognosticatory character of fortune-telling called Tuchen (圖讖; prediction, prophecy). On the other hand, Zhang accepted 占術 (divination), which he specifically official. In fact, some kinds of divination, for example, Boshi (卜筮; scapulimancy and divination), and oneirocritics (夢占い) were used and described in the books entitled 思玄賦 and 靈憲 written by Zhang. The fact that Zhang criticized Tuchen(圖讖) is widely known, but no specific study has been done regarding Zhang's criteria of judgment as to "what's accepted and what's denied in divination". This article discusses the divination that appeared in books written by Zhang and reviews his critique on Tuchen (圖讖), which clarify his thoughts on a close relationship between heavenly bodies and divination. The author provides an account of Zhang's philosophy and evaluates Zhang's philosophy both from the point of view as a literary man and as a scientist against the background of the history of thought in the Eastern Han Dynasty.